

「公共交通の利便性と運動習慣とヘルスリテラシーの関係性－SWCプロジェクト(51)－」

山口将大<sup>1</sup>、塚尾晶子<sup>1,2</sup>、千々木祥子<sup>1,2</sup>、久野譜也<sup>2</sup>

1 つくばウエルネスリサーチ

2 筑波大学大学院 人間総合科学研究科

**【目的】** 近年、日本では健康格差が問題視されており、それには都市環境、ヘルスリテラシーの差が関係していることが分かっている。本研究では、2市における都市環境と健康度への影響度を明確にすることを目的とした。

**【方法】** A市5700人、B市1831人（国保被保険者、40-74歳）を対象に、ライフスタイルに関する質問を自記式調査にて行った。集計結果を用い、各小学校区単位にライフスタイル、住環境の関係性を調べた。

**【結果】** A市において、車・バイク利用率が低い小学校区ほど、ヘルスリテラシーが高い人、運動習慣がある人の割合が高いことが示された（ $p = 0.01$  and  $p < 0.01$ , respectively）。また、ヘルスリテラシーが高い人が多い小学校区ほど、生活習慣病罹患率が低いことが示された（ $p = 0.01$ ）。B市において、車・バイク利用率が低い小学校区ほど、運動習慣がある人、歩行速度が早い人の割合が高いことが示された（ $p < 0.01$ ）。また、公共交通徒歩圏カバー率が高い小学校区ほど、ヘルスリテラシー、運動習慣が高いことが示された（ $p = 0.03$  and  $p = 0.01$ , respectively）。

**【結論】** A市、B市の両市において、公共交通の利便性がよい（鉄道駅周辺地区や公共交通、商業施設徒歩圏カバー率が高い）地域住人は利便性のよくない中山間地域の住人と比べ、ヘルスリテラシーが高く、運動習慣を持ち合わせている人が多いことが示唆された。